

報道＞諫早湾漁業被害編

タイラギ・アサリ・牡蠣被害

'91 回顧 主役 わき役

□ 2 ■

諫早湾で十月初め、有明海特産の二枚貝、タイラギが大量に死んでいるのが見つかった。海底には、厚さ二十センチから一メートルの死因は窒息死だった。

「四月には、片方の手のひらの下だけで、十五枚以上はいたのに」と北高来郡小長井町の漁業田実里志さん(三七)。「ひよっとする」との不安は的中した。

タイラギ漁が解禁となった。初日の漁獲量は例年の五割にも満たなかった。漁場は、諫早湾干拓事業の潮受け堤防の外側。漁場のど真ん中に、堤防建設用に砂を採取している場所がある。

「採砂工事で巻き上げたヘドロが原因」「国は原因不明という一方、採砂は関係ないという。矛盾じゃないか」「工事を中止せよ」。

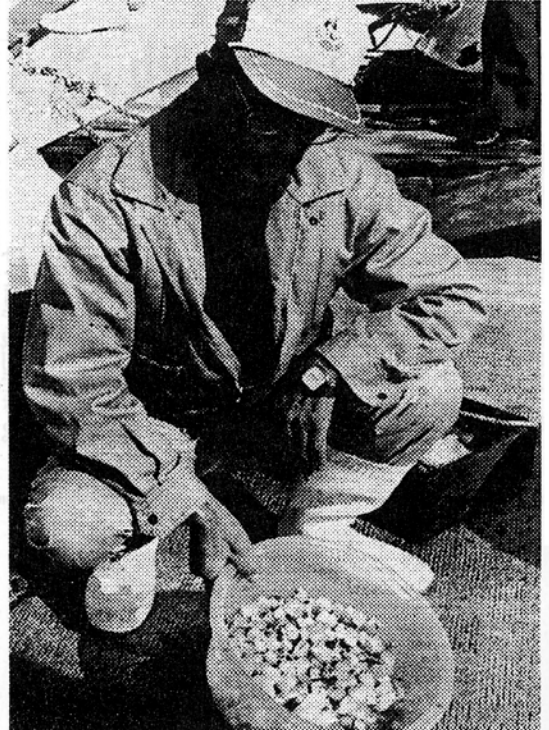
諫早湾干拓

タイラギ大量死 問い直される環境

干拓工事に、漁民が疑いの目を向け始めた。九州農政局諫早湾干拓事務所は「砂は五月から九月にかけて、二万平方メートルだけ。仮に漁場が二百センチあり、ヘドロが平均三十センチ積もった計算として、その総量は六十万立方メートル」と反論する。

「疑問もある。漁民が主張するように、一時工事を中止してみてもどうか」

諫早湾にソ連や東南アジアなどから越冬のため飛来する鳥は、ツクシガモやダイシャクシギをはじめ、その数百七十種余。国内の干潟では、最大の採餌(さいじ)場とされている。



大量死で漁獲が激減した特産のタイラギ
＝北高来郡小長井町の小長井漁港で

2年続きの不漁



予測通りの不漁に荷揚げの漁民もがっかりした表情
＝北高小長井港＝

タイラギ漁解禁

有明海 原因は諫早湾干拓？

【諫早】資源調査で記録

的な不漁の見通しが出ていた有明海のタイラギ（二枚貝）漁が一日解禁されたが、初日の結果は予測通りの不漁に終わった。資源保護していたポイントが今年の漁場になっていただけに「ひよっとして」との漁民のわずかな期待も空振りし二年続きの最悪の不漁に沈痛な表情。一帯で続く諫早湾干拓事業との因果関係が再燃

しそつ。

タイラギ漁民でつくる「新泉水海潜水器組合」（合中勝則組）組長、九十一人によると、この日は原の操業許可を受けた八十三隻のうち約七十隻が出漁した。操業時間は今年不漁が予測されたため、午前九時一正午と二時間延長し異例の三時間にした。その結果、一隻当たり平均採取量は約六キと極端に不漁だった昨

年並み。例年と比較すると五分の一から六分の一。

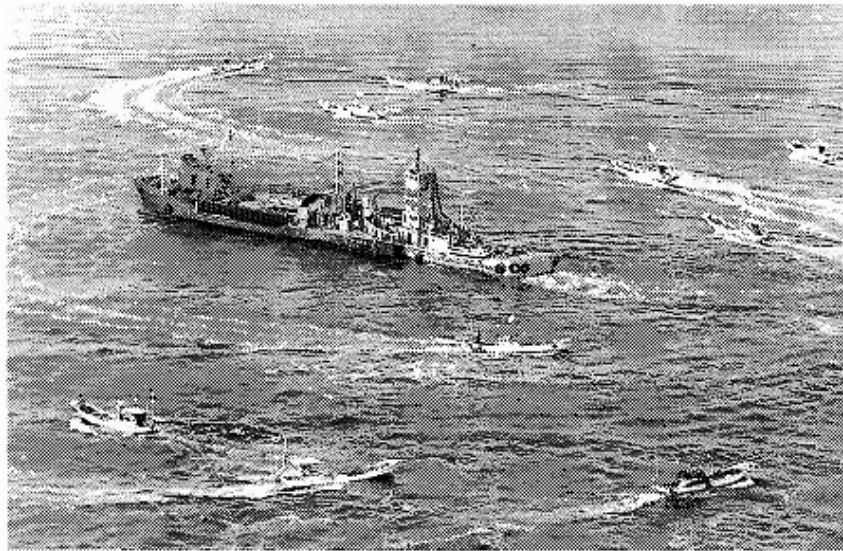
漁民が期待していたのは二年前から禁漁区にしていた小長井町沖合の通称「竹の崎」漁場。しかし、出漁した小長井町小川原浦名の田実里志さん（三〇）、志朗さん（五〇）親子によると「ヘド口が積もり死に貝が多く漁にならなかった」。

解禁を前に県が十月八日、漁民に委託して実施した資源調査で不漁が予想された。また、九州農政局諫早湾干拓事務所が十一月十八、十九日行った調査で、漁民らに非公式に示した結果でも昨年より個体数が三分の二に減少していた。

合中組組長は「原因は干拓工事しか考えられない。二、三日、操業して対応を検討したい」と原因究明に乗り出すことを示唆。同事務所は「この日の事実確認をしないのでコメントできないが、工事が大きな影響を与えているとは考えられない」としている。

抗議頂点 海上デモ

諫早湾干拓工事で小長井町漁協青年部会



砂運搬船を取り巻いて抗議する漁船
＝小長井町沖の諫早湾で、本社ヘリから

漁船24隻、運搬船困む

「三者会談」を申し入れ

諫早湾の干拓工事に反対している北高来郡小長井町の小長井町漁協青年部会(山崎正人部長、三十六人)は二十一日午前、漁船

二十四隻を湾の入り口に出して、湾内の工事現場に向かう砂運搬船三隻の航行に抗議し、海上デモをした。抗議行動は二十一日に続いて二回目。漁民はこの後、九州農政局諫早湾干拓事務所を訪れ、工事を受け入れていた上部団体の新泉水海四漁協権者会をまじえた三者会談を設定するよう申し入れた。同青年部会の漁民は午前七時すぎ、漁船で小長井港を出港し、湾口にいた砂運搬船に向かって、湾内に入らぬようハンドマイクで訴えた。砂運搬船はそのまま湾内に入ったが、漁民は二十一日のような阻止行動はせず、海上デモに移った。三池海上保安部の巡視艇一隻が警戒に当たった。同湾は特産のタイラギ漁が昨シーズンに続いて不漁

で、同青年部会は九州農政局諫早湾干拓事務所などに對して、不漁原因の解明、生活資金の融資などを求めている。同干拓事務所の田中興基所長は「工事の進め方については、権者会と合意している。青年部会に伝わっていないとすれば、残念だ」と述べ、三者会談の設定に努力することを伝えた。

工事中断、県に要請 市民団体

干拓保護を訴える市民団体、日本湿地ネットワーク(山下弘文代表)は二十一日、タイラギなど諫早湾の水産生物が激減した原因が解明されるまで、九州農政局に工事を中断するよう申し入れることを、県に要請した。さらに、他団体と共同で、干拓事業に関する公開質問もし、二月十三日までに回答するよう求めた。

同ネットワークは、タイラギの不漁は干拓工事によるもので、その影響は、佐賀県でも漁獲の減少を招いていると主張。工事中断を求めるとともに、大学や水産試験場などによる原因究明のための共同研究体制を早急につくるよう要請。研究結果の公表も求めた。

公開質問は、同ネットワークと、環境保護団体の地球の友日本支部、日本野鳥の会長崎県支部との共同でされた。九州農政局諫早湾干拓事務所による工事影響調査の結果を公表すること

や、干拓地の利用計画の見直しなど十四項目にわたっている。山下代表は「早急の原因を究明しなければ、有明海沿岸の漁民が、干拓事業に反対して総決起する。その前に、県としては誠意ある対応をしてほしい」と話した。

同ネットワークは、タイラギの不漁は干拓工事によるもので、その影響は、佐賀県でも漁獲の減少を招い

タイラギに 黒斑の被害

諫早湾

諫早湾内漁場の生物や海底の状態を調査し、水産振興に役立てるのを目的として諫早湾干拓事務所が設置した諫早湾漁場調査委員会が十六日、諫早市内のホテルで開かれた。秦章男委員長(元県水産部長)によると、湾内のタイラギに多毛類が寄生したために発生する黒斑(こくはん)が広がり、かなりの被害が出ていることがわかったという。

昨年六月に設置されてから三回目の委員会。この日は九三年度の調査結果の検討と九四年度の調査計画を討議した。

諫早湾干拓事務所の調査では、湾内漁場の二十四地点で採取したタイラギ七十八個のうち、生きている貝の七一%、死んだ貝の八〇%に黒斑が見られた。

多毛類は、タイラギのからを破って中に入り込み、貝を殺すとみられているが、その生態はまだはっきりしない、という。同委員会では、多毛類もタイラギ漁獲減の一因ではないかともみて、それに調査するようになりし。

1994年11月--



諫 早 湾

調査操業で成貝1個だけ

シヨツク2年連続

新泉水海 29日の総会で決定 潜水器組合

【諫早】諫早湾のタイラギ漁が十二月一日からの解禁を前に、事実上休漁となる。漁業者らの事前の資源調査操業で稚貝は見つかったものの、成貝は一個しか見つからず、漁ができない状態。同湾でタイラギ漁をする新泉水海潜水器組合(台中勝則組合長、八十九人)は二十九日に総会を開き今期の漁中止を正式に決めるが、昨年に続く休漁に頭を抱えている。

【諫早】諫早湾のタイラギ漁が十二月一日からの解禁を前に、事実上休漁となる。漁業者らの事前の資源調査操業で稚貝は見つかったものの、成貝は一個しか見つからず、漁ができない状態。同湾でタイラギ漁をする新泉水海潜水器組合(台中勝則組合長、八十九人)は二十九日に総会を開き今期の漁中止を正式に決めるが、昨年に続く休漁に頭を抱えている。

諫早湾のタイラギ漁は平成四年に千二百八十八の漁獲量で、前年の約三分の一に減った。昨年も調査操業で成貝が八個しか見つからず、漁を初めて中止した。二年続きの休漁について、台中組合長は「みんな土木作業に出たり、アサリと食べている。原因は特定できない。」

の獲殖などで食いつけない。採りたくても成貝がいらないのでどうしようもない」と厳しい表情。

県漁連などによると、この稚貝が順調に成長しても、来年のシーズン時点で貝柱がまだ小さくて商品価値は低いという。このため、あと二年ほど休漁して成長を見る必要があるとの見方も出ている。

タイラギ不漁の原因について、漁民は諫早湾干拓事業による影響を指摘しているが、九州農政局諫早湾干拓事務所は「タイラギの周期的増減や平成三年九月の台風などの影響が考えられるが、原因は特定できない。」

「タイラギ不漁は 工事の影響」

諫早事務所所長が発言

「原因不明」の見解に一石

【諫早】九州農政局諫早湾干拓事務所(諫早市西里町、立花所長)が先月、女性を対象に諫早湾地域の将来について座談会を諫早市内で開いた際、立花所長が「タイラギ(二枚貝)不漁は干拓工事の影響」と発言していたことが、出席者の複数の証言から二十六日分かった。所長はこれまで「タイラギ不漁の原因ははっきりしない」と発言していただけに、彼を驚かせた。

座談会は先月二十日、なんとかしたい」と発言し、同干拓事務所などが発行する広報紙「いざかた」に掲載する目的で開いた。テーマは「女性が語る諫早湾地域の未来について」。諫早市や北高地区の農業や漁業、商業、行政、議会などにかわる女性十四人が選ばれて参加した。

関係者の話を総合すると、座談会に入る直前に諫早湾のタイラギ不漁干拓工事が話題となり、所長が「タイラギ不漁は干拓工事の影響。そのために漁業補償をしている。追加補償を要する」と発言した。出席者の中には「干拓工事の影響は、はしゃべった話ではない。漁業補償の話は、工事の影響を認める発言をするはずがない。いざかた」

「タイラギ不漁の原因を干拓工事の影響だと指摘してきた日本漁協や、トワークの山下弘文事務所代表は「有明海でのタイラギ不漁は諫早湾を除いて豊漁(豊漁協定を結んでいる。)

り、つい本音を言ったのだらう。工事の影響評価をせざるを得ない」としている。

諫早湾干拓事業をめぐっては、県が昭和十一年に開内十二漁協と総額二百四十三億五千円、漁業補償協定を、海外十一漁協と総額十二億一千円、の漁業補償協定を結んでいる。

2年連続発見できず

諫早湾漁場調査委
漁場造成など県に要望へ

タイラギ稚貝

それによると、同湾口の小長井町側と瑞穂町側の計八カ所で採捕したが、死んでいた貝のほとんどが小長井町側で、生きた貝も瑞穂町側よりほんのりに少なかった。小長井町漁民の「タイラギの成育が芳しくない」との主張を裏付けるような結果だった。

こうしたことから調査会としてはタイラギ成育のための漁場造成や稚苗生産・放流などの水産振興策を県などに早急に要望することとした。漁場造成については海産物母地を覆うような成育に適した環境づくりが考えられるが、具体策は未定。会では、七年度の調査報告(2月17日)で、調査箇所のカベノエヌメの稚貝(三センチ以下)が海産物生息しているのを六年度に続き発見できず、着床稚貝の調査方法の変更も決めた。同湾のタイラギ不漁はタイラギ稚貝が平成五年冬からの三年連続で不漁中。

この日の会合では、同湾でタイラギ不漁を訴える新泉水産漁水師組合(新泉漁師組合)と同委員会が、二月中旬と三月初旬に同湾で合同実施したタイラギの採捕調査の結果も報告された。

タイラギ4年連続休漁が

試験操業 水揚げわずか

諫早湾

北高来郡小長井町などの器組合が十一月の漁解禁前に沖合の諫早湾で水揚げされる高級な二枚貝のタイラギ漁が、この冬も休漁になる恐れが出てきた。湾沿いの漁業者でつくる「新泉海水潜水器組合」(新宮隆喜組合長、七十六人)が試験操業と貝の生育調査をした結果、水揚げがほとんどなかった。正式には二十一日の総会で決めるが、四年連続で休漁になる可能性が強くなっている。

同組合などによると、試験操業は今年七月にあり、漁場の十五地点を選び、それぞれ海底に五分間潜って貝を探した。その結果、殻長十七センチほどが二枚、四、五センチの稚貝が十九枚ほど水揚げされただけだったという。

タイラギ漁は、県知事の許可が必要で新泉海水潜水

器組合が十一月の漁解禁前に試験操業をしているが、新宮組合長によると、今年はこの四年間で最悪のデータになったという。

県海洋漁業課のまとめでは、有明海の水揚げは同県内分だけで一九九〇年に三千七百九十六トンだったのが、九二年には四百二二トンに激減。潜水器組合は九二年から休漁している。

不漁の原因として漁民の一部が干潟保護団体の間では、九二年から本格化した諫早湾干拓事業の潮受け堤防工事で硫化素を含む海底のヘドロが拡散されたためではないか、との指摘もある。

1997年(平成9年)10月28日 長崎新聞

5年連続休漁に

諫早湾入り口のタイラギ漁

成育確認は1個だけ

【諫早】諫早湾でタイラギ(二枚貝)漁をする新泉海水潜水器組合(石田徳春組合長、組合員七十三人)は二十六日、北高小長井町民センターで総会を開き、タイラギの成育が確認できず、今年も休漁を決定した。これでタイラギ漁の休漁は五年連続。

国営諫早湾干拓事業で建設された潮受け堤防外側の同湾入り口がタイラギ漁の漁場。今年十月十三日に四十カ所でそれぞれ三分間、潜水た。このため休漁は来年以降も二、三年続くとみられている。

総会では全会一致で休漁を決定。同組合は「タイラギ資源の枯渇は、諫早湾干拓事業に伴う漁場の砂の採取が原因としか考えられない。工事が終わらないと漁の再開は無理かもしれない。荒廃した漁場環境の回復を求めたい」と話している。

1997年(平成9年)3月15日 長崎新聞

諫早湾漁民

九州農政局に救済要望

「タイラギ激減 4年連続休漁」

【諫早】諫早湾でタイラギ(二枚貝)漁をする新泉海水潜水器組合(新宮隆喜組合長、七十六人)は三日、九州農政局熊本支店に対し、タイラギ激減で四年連続休漁となっている事態の救済を要望した。タイラギ休漁問題で同組合が同農政局に直接出向いたのは初めて。

同組合はタイラギの激減からの資源の航行などで成育不良を理由に、平成七年度から約五十人が訪れた。対応し五年から同湾でのタイラギ漁を中止し、これを対する村松雄介同農政局建設部長は「経済的な救済は干拓事業を休めている。同組合は『台風の被害なども事業での雇用で対応している。金銭的な補償には応じられない。漁業振興には長

崎県と協力してお互いにたい」と答えるなど、タイラギ激減については、同干拓事務所委託で諫早湾漁場調査委員会が調査しているが、説明できていない。

新宮組合長は「タイラギ激減の解明ができないまま、同干拓事業の再開は、同湾の干拓生態系保存のため、同干拓事業の中止区間に水門を設置する計画に変更し、排水の解凍開放などを求めている。

設障で、諫早湾干拓事業の潮止め工事を進めることで入りの抗議もあると述べた。

諫早自然保護協会が干拓見直し請願送付を農務大臣宛に

【諫早】諫早自然保護協会(諫早市会長)は十四日までに、衆参両院議長に対し、諫早湾干拓事業の見直しを求める請願を郵送した。

海明有の近付口湾早諫

ノリ生育不良 収穫断念

佐賀・大浦漁協

養殖ノリの収穫シーズンを迎えた佐賀県で、長崎県、諫早湾の河口に近い佐賀県・大浦漁協(大浦町)のノリが、海中の栄養不足で生育不良となり、収穫を断念したことが十日、分かった。漁業者や学者からは、諫早湾干拓事業の周辺防波堤のつくりが影響その調査の必要性を指摘する声があり、佐賀県有明水産振興センターは栄養不足と潮の流れの関係を調査することを検討している。一方、九州農畜総合研究センターは「関係が影響しているかは、一概にはいえない」とは慎重な見方を示している。

海中の栄養塩不足

大浦漁協の今期のノリ養の漁獲量は前年並みの約一割に落ち、五割程度のノリが収穫できず、天候不順、養殖業者は「別の流れがノリを流して、干拓事業の周辺防波堤のつくりが影響している」と指摘している。干拓事業は、四月半ばには栄養塩不足に陥り、今シーズンはノリの収穫量が前年並みの約一割にとどまり、色落ちがひどく、収穫引きがなくなり、河川の汚染、大浦町のノリ養は、河川に引寄せられ、一時停止の恐れがある。

堤防との関連調査検討



大浦漁協以外の多くの海域ではノリの採取作業がはじまっている。五日未明、佐賀県東部の有明海で、

タイによると、十月末現在、大浦漁協のノリの生育率は平均で、約六十パーセントに回復した。



今年九月に平均値を上回っていたが、十月に急低下した。養殖業者は「干拓事業の周辺防波堤のつくりが影響している」と指摘している。大浦漁協は、商品化の不安を解消するため、関係機関と連携して調査を進めている。

諫早湾

アサリ貝が大量死

佐賀近くまで 赤潮原因か

国の干拓事業が進む長崎県諫早湾入り口の小長井町沖合で、八月初めから中旬にかけてアサリ貝が大量に死んだことが同県の調べで二十五日、明らかになった。小長井町漁協組合員らが養殖しており、被害は推計で一億円近いとも言われている。

県漁政課によると、アサリ貝大量死は同町漁協から今日五日に連絡があつて分かった。漁協事務所がある小川原浦名付近を中心に佐賀県境近くまでの養殖場被害が広がり、二十日ごろまで続いた。

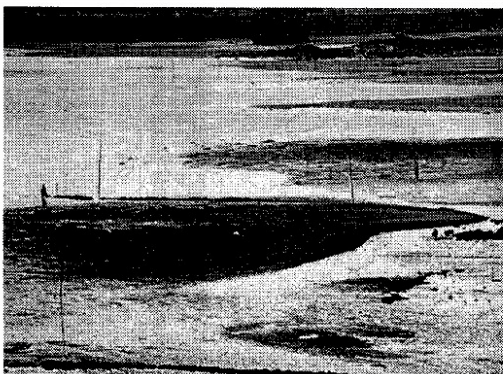
が出た。「シャットネア アンティカ」という緑色ベlemn毛藻類のプランクトンの異常繁殖だった。同県では当初「貝に被害を及ぼすプランクトンではない」との見方をしていた。

県漁政課では「干拓事業の影響かは分からない」と言っている。一方、小長井町漁協の新宮隆喜組合長は「以前は赤潮が発生しても短期間で消えていた。調整池の水質浄化や放流の仕方を工夫してほしい」と言っている。

同県のノリは現在、昨年と比べて赤潮被害が少なく、養殖業者の回復もあり、大浦を除けば生育は順調。

長崎県水産庁の藤田二教授(養殖増殖)は「少雨に加え、諫早湾もあつた雨の面を閉め切れば影響が出てくる可能性がある。ただ、データを集めてみないと分からない」と話している。

堤防内の状況が改善されたが、湾外への影響を注視する必要がある。有明海の全体的な調査の必要性が改めて話されている。



養殖アサリ貝の大量死で経営悪化が懸念される
—北高小長井町の地先養殖場

諫早湾口

養殖アサリ大量死

最大規模の赤潮原因か

国営諫早湾干拓事業が進む諫早湾口の北高小長井町沖合で、養殖のアサリ貝が今月初旬から中旬にかけて大量死し、同町の養殖漁業者約百戸に被害が出ていることが二十六日、県の調べで分かった。県は赤潮の発生による酸欠状態が原因とみている。赤潮は一九八九

年の観測以来、県内で最大規模だったという。県漁政課によると赤潮は七月中旬に発生し、小長井町沖合の養殖場を中心に被害を及ぼした。赤潮は鳥原沖から熊本県側まで広がり今月上旬に消滅した。シャットネラ・アンティカというプランクトンの異常繁殖が原因で、シャットネラは魚類に大きな被害を及ぼすとされる。今回初めてボラやスズキなど天然魚の大量死も確認された。シャットネラによる赤潮は八九年以降、有明海や橘湾で度々発生しているが、他のプランクトンによる赤潮を含めても今回は県内で最大規模。シャットネラの個体数は、これまで海水一リットル中約二万個が最高だったが、今回は最大約五万個を数えた。

常繁殖が原因で、シャットネラは魚類に大きな被害を及ぼすとされる。今回初めてボラやスズキなど天然魚の大量死も確認された。シャットネラによる赤潮は八九年以降、有明海や橘湾で度々発生しているが、他のプランクトンによる赤潮を含めても今回は県内で最大規模。シャットネラの個体数は、これまで海水一リットル中約二万個が最高だったが、今回は最大約五万個を数えた。

を抽出した。同課は「干拓事業の影響かどうかは分からない」と話している。

言外に諫早干拓の影響

〇一方、北高小長井町漁協の新宮隆喜組合長は「赤潮の長期間滞留がなぜ起きたのか原因が不明だ」といっている。今後への不安をにじませた。

同漁協によると今月五日、同町の海岸線で養殖しているアサリ貝が死んでいるのが分り、県水産部へ連絡。その後、町内ほとんどの養殖場で大量に死んでいることが判明した。県が調査しているが原因は分かっていないという。

新宮組合長は「これまでの赤潮は二、三日間の発生でなくなったが、今回は二十日間くらい滞留していた。昨年の湾締め切り後、大きいアサリ貝が死ぬことも起きている」と話し、アサリ貝の養殖が諫早湾干拓事業の影響を受けていることを言外ににじませた。

(諫早)

タイラギ漁 今季も休漁決定

諫早影響調査 結論要請へ

新泉水海潜水器組合

【諫早】諫早湾でタイラギ(一枚貝)漁をしながら、成育不良で五年連続して休漁に陥っている新泉水海潜水器組合(石田徳春組合長、五十五人)は二十六日まで、今季も休漁することを決め、休漁を余儀なくされている。同組合は休漁のほか、上部組織ともいえる小長井町、瑞穂町、土黒、神代の四漁協に対し、同事業の影響調査を求めている。同組合は「タイラギの成育が悪いのは諫早湾干拓事業に伴う漁場の砂採取や潮流、水質の変化といったことが原因と考えられる」と話している。

諫早湾

タイラギ漁休漁

6年連続組合「干拓の影響」

長崎県・諫早湾で一枚貝のタイラギを養って採る漁業者でつくる新泉水海潜水器組合(石田徳春組合長、五十五人)は二十五日、同県瑞穂町で通常総会を開き、「タイラギがほとんど成育していない」として、十一月一日解禁となる今季の採集を行わないことを決めた。同組合の休漁は六年連続。組合員らは「国の諫早湾干拓事業の潮受け堤防工事の影響で、魚場にヘド

ロがたい積じたため」とも決めた。反発しているが、九州農政局や長崎県は原因を特定し、防工事本格化した翌年の一九九一年と九二年に記録

していない。同組合は今月十三日、潮受け堤防外の十九カ所でタイラギの成育調査を実施。確認できたのは生貝三個と死貝一個だけだった。

総会では、干拓事業の同湾への影響調査をしている県や学者らで構成する同湾漁場調査委員会に対して、不漁原因の早急な結論を求

められている。同組合は「タイラギの成育が悪いのは諫早湾干拓事業に伴う漁場の砂採取や潮流、水質の変化といったことが原因と考えられる」と話している。

的の不漁に陥り、九三年以降は毎年休漁を強いられる。組合員もこの一年間で十八人減るなど、ピーク時の約半分となっている。

小長井沖に大量の赤潮

漁業者 「干拓で環境変化」

諫早湾

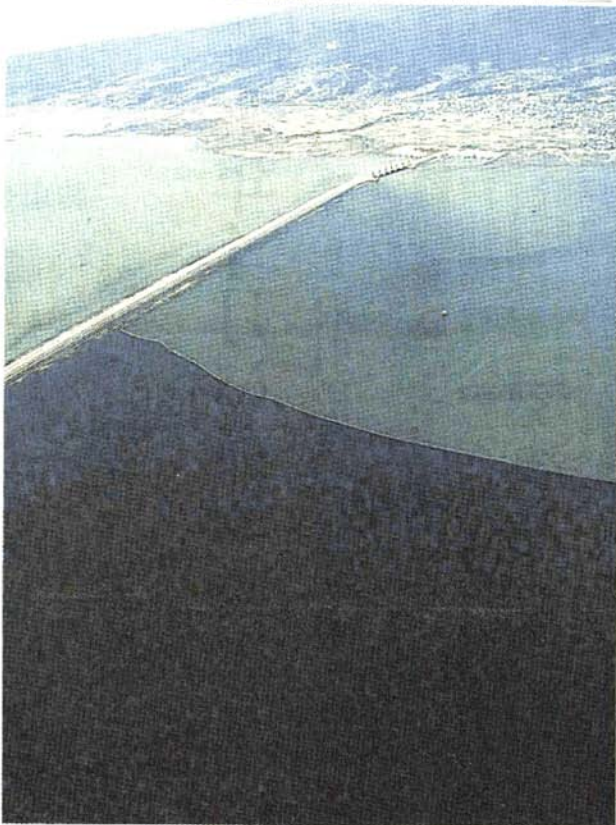
【諫早】国設諫早湾干拓事業が進む諫早湾口の北高小長井町沖合に赤潮が大量発生していることが三十日、分かった。今夏には赤潮の大量発生が原因とみられる養殖アサリ貝の大量死も起きており、同町漁協は「潮受け堤防排水門から出される高栄養化した大量の水が赤潮の原因だ」として警戒を強めている。

同町漁協によると、赤潮は今年九月二十五日、発生。三十一日には高来町地先の潮受け堤防排水門付近から幅一キロ、長さ十数キロにわたって発生した。魚類の大量死は今のところ確認されていない。小長井町の沿岸では漁業者が九月末からアサリ貝の種目を放流しており、赤潮の影響が心配されている。県水産部によると、今回の赤潮はフィロコサ・シヤボニカというプランク

トンの異常繁殖が原因とみられており、今夏の赤潮の原因はシャットネラ・アンテイカというプランクトンと推定されている。同町漁協は、赤潮の発生と連動して、排水門から大量の水が拡散する状況把握するため海上調査を実施する予定。同干拓事務所は調査はあくまで水の拡散や水質を把握するためのもの。赤潮の発生との関連を調べている。同町の漁業者は「干拓時に排水門から大量の水が出る。いったん水は有明海に広がるが、満潮時に押し戻されており、小長井の沖合は調整池の水が滞留

している。潮流も潮受け堤防ができたことから変わってしまっている。この時期に赤潮の発生はこれまでなかった。干拓事業の影響で環境が変わったせいとしか考えられない。原因をはっきりさせてほしい」と強い口調で話している。

西日本新聞 1998年(平成10年)11月1日



赤潮で変色した海面(手前)と北部排水門(奥)からの排水で色分けされた諫早湾
—31日午前11時半すぎ、本社ヘリから

諫早湾 大量の赤潮

潮受け堤防 外側に発生

国の干拓事業が進む長崎 外側一帯で、赤潮が大量に目分かった。付近一帯で、井町漁協関係者は「堤防内の水質悪化やリンの増えで富栄養化し、海へ排出されているためではないかと警戒している。アサリへの影響を懸念している。諫早湾では夏場の赤潮発生は過去数回あるが、この時期の発生は極めて異例。同町漁協によると、赤潮は二十四、二十五日、潮受け堤防の北部排水門(自民高来町沖合)付近で発生し、次第に湾内に北側へ波及し、現在では高来町沖まで長さ約八十キロにわたるといっている。

三十一日午前、上空から諫早湾を見ると、目立つ赤潮の帯は長さ約一キロ、幅約一キロにわたり、潮受け堤防の外側の海面を覆っている。堤防内の緑色の遊泳者が浮かび上がり、赤潮付たじゅうたんを敷いた。県水産部によると、今回の赤潮はフィロコサ・シヤボニカというプランク

トンの異常繁殖が原因とみられ、地域によっては酸欠による個体被害が予測される」といっている。

同町漁協によると、今夏、今夏に異常な種類のプランクトンが大量発生しており、漁業者らは「遊因の水質を改善するが、排水方法を改善するかは難しい」と話している。

九州農政局諫早湾干拓事務所は「原因が潮受け堤防から排出される水は思いがけないが、現時点では因果関係はあやまいか」とも話している。

九州農政局諫早湾干拓事務所は「原因が潮受け堤防から排出される水は思いがけないが、現時点では因果関係はあやまいか」とも話している。

タイラギ7年連続休漁

諫早湾、成育不良理由に

新泉水海潜水器組合

【諫早】諫早湾でタイラギ(二枚貝)漁を営む漁民らでつくる新泉水海潜水器組合(松永秀則組合長、五十三人)は七日、北高小長井町で通常総会を開き、タイラギの成育不良を理由に今季も休漁することを決めた。休漁は一九九三年から七年連続。

同組合によると、昨年十かし、今年十月の同じ場所 かつたという。月に小長井町沖で実施したの調査では、長さ五十七センチの潜水で三百一五百個の水目視で最高約八十のタイラギにとどまった。島原半島沖ほど目視確認できないと出ラギの個体を確認した。し、の調査では貝は確認できな漁しても採算に合わない。

成育状況からみて操業は無理などと組合員らに説明した。

タイラギ漁は十二月から三月がシーズン。国営諫早湾干拓事業の潮受け堤防外側当たる同湾入り口が漁場だが、九三年以降タイラギが激減。かつて百人を超えた漁民は現在、半減している。一方、県は一昨年から特別対策事業で漁場に砂を入れて環境整備を続けている。

同組合長は「成育が悪いのは干拓事業の影響で生態系が変わったことが原因と考えられる」と指摘。九州農政局諫早湾干拓事務所では「成育不良については学者や国、県の関係者でつくる諫早湾漁場調査委で原因を調べているが、結論は出ていない」としている。

同組合が先月十二日に小長井町の試験漁場に潜ったタイラギの生育状況を調べたところ、五センチ程度の稚貝は確認されたものの、商品になるような二十センチ程度の稚貝は確認されなかったという。同じ場所でも一昨年に行われた試験潜水で、商品になるような二十センチ程度の稚貝は確認されなかったという。同組合長は「採れる貝がない。潜っても採算がとれない」と話している。

諫早湾

タイラギ7年連続休漁

新泉水海潜水器組合「採れる貝がない」

小長井、瑞穂町の漁師でつくる新泉水海潜水器組合(松永秀則組合長、五十三人)は七日、「タイラギがない」などとして、今年度も諫早湾でタイラギ漁の休漁を決めた。同湾でのタイラギ漁は七年連続の休漁となる。

同組合が先月十二日に小長井町の試験漁場に潜ったタイラギの生育状況を調べたところ、五センチ程度の稚貝は確認されたものの、商品になるような二十センチ程度の稚貝は確認されなかったという。同じ場所でも一昨年に行われた試験潜水で、商品になるような二十センチ程度の稚貝は確認されなかったという。同組合長は「採れる貝がない。潜っても採算がとれない」と話している。

タイラギ不漁の原因については、海底の砂を採取したところ、諫早湾干拓事業の影響とする声は組合員の間などからは強い。同組合は休漁に対する補償を行政側から求めることは考えていないというが、漁場に砂を戻すことなどの漁業振興策を要望したいとしている。



地元漁協のダイバーが諫早湾に潜ってタイラギの稚貝を採取した(今年2月)

ブロック 最前線 KYUSHU

諫早湾口部の長崎・小長井町

養殖アサリ 赤潮で「全滅」

国営干拓事業の進む長崎県・諫早湾に面した同県小長井町で八月下旬、赤潮が発生し、養殖アサリが大量に死滅していたことが十七日、分かった。同県漁政課などの調べでは、被害額は約二億五千万円。赤潮は今夏の高温小雨による有毒プランクトンの大量発生が原因とみられるが、漁業関係者から干拓事業の影響を指摘する声も出ている。

漁業関係者 「干拓が影響」

同課によると、赤潮はシャットネラ・アンティニに熊本県の有明海沖で発生。四日に諫早湾口部方面に移動し、長崎県小長井町や有明町沖に滞留した。同課には十一日にアサリ被害の報告があった。同課が同日調査したところ、通常観測されない有害種の植物性プランクトンの一種、な被害は初めて。(一九九九年)

九七年の諫早湾干拓発生しやすい環境を指し、干拓事業は「堤防閉め切り前後の水質調査で、赤潮は有明海の広範囲で発生しており、干拓事業との因果関係は分からない」としている。

長崎大教育学部の東幹夫教授(水生生態学)は「有明海全体を浄化していた可能性のある干拓事業との因果関係は、明確な差は出ていない。赤潮は、有明海の広範囲で発生しており、干拓事業との因果関係は分からない」としている。

8年連続の休漁

諫早湾のタイラギ

干拓の影響 来春まとめ

長崎県小長井、瑞穂両町の漁業者でつくる新泉水海潜水器組合(松永秀則組合長、五十人は八日までに、今冬の諫早湾のタイラギ漁を休漁とすることを決めた。休漁は一九九三年から八年連続。「不漁の原因は諫早湾」

干拓事業の影響」とする同組合側の要請を受けて、九州農政局諫早湾干拓事務所が設けた漁場調査委員会は来年三月をめぐりに不漁の原因を究明、結果をまとめる。

同組合によると、十一月二十日の成育調査では、五ヶ月前後の稚貝が見つかっただけで、商品価値のある二十一二十五ヶのタイラギは確認できなかった。このためシーズンである十二月三月の休漁を決めた。不漁の原因については、九三年に漁場調査委員会が発足、継続調査をしている。松永組合長は「調査委の回答を待って総会を開き、今後の対応を決めた」と話している。



過去最大規模の赤潮が発生した諫早湾
11日午後一時半ごろ、長崎県小長井町沖(本社ヘリから)

諫早湾に赤潮

排水門の排水も一因?
小田達也・長崎大教授
(海洋生物学の話)海水
中の富栄養化と温度、塩
分などが関係している。
排水門からの排水も一つ
の原因ではないか。プラ
ンクトンは消滅した後、
海底に沈んで種となる。
潮流が弱いとその地域で
増殖し、再び赤潮となる。

県南水産業普及指導セ
ンター(島原市)や小長
井町漁協によると、赤潮
では海面が一面赤茶色に
なった。検出されたのは
植物プランクトンのクリ
プト藻で毒性はないが、
海水一リを舐めたり最大四
万八百個を確認した。佐
賀県太良町沖でも同様の
赤潮が発生している。

過去最大級 潮受け堤防から 島原沖まで40キロ

長崎県の諫早湾干拓事業の潮受け堤防から同県島原市沖にかけて、約
四十キロにわたり赤潮が発生していることが九日、分かった。同県による
と、今ところ漁業被害の報告はないが、赤潮の発生面積は過去最大規
模という。

諫早湾では、潮受け堤
防での湾奥部閉め切り以
降、赤潮が急増。漁業者
の間では「潮受け堤防が

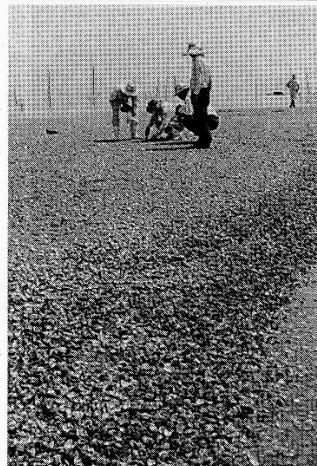
は七日ごろに発生。ピー
クは八日で、小長井町沖
では海面が一面赤茶色に
なった。検出されたのは
植物プランクトンのクリ
プト藻で毒性はないが、
海水一リを舐めたり最大四
万八百個を確認した。佐
賀県太良町沖でも同様の
赤潮が発生している。

工事の早期再開
諫早市長が要望
九州農政局に文書
有明海のノリ不作問題
をきっかけに長崎県諫早
湾の国営干拓事業が中断
している問題で、地元、
諫早市の吉次邦夫市長は
九日、熊本市の九州農政

で、き潮流が弱まったこと
や、調整池の排水が関係
しているのでは」との声
が出ている。しかし、九
州農政局諫早湾干拓事務
所は「有明海のほかの場
所でも赤潮が発生してお
り、因果関係は分からな
い」と話している。
同センターが今年確認
した諫早湾での赤潮発生
は三件目。

関係者は中断で収入が途
絶え、生活に困っている
として工事の早期再開を
求める文書を提出した。
調整池水質保全策
話し合いは平行線
漁協と九州農政局
九州農政局は九日、長
崎県諫早湾の四漁協組合

業の調整池の水質保全策
を説明した。漁協側は福
岡など三県漁連の主張は
通るのに、地元の見解は
どうして反映されな
いかなど反発、話し合い
は平行線のままだった。
五日の説明会で小長井
町漁協は、漁場などに影
響が少ないように潮受け
堤防の中央部で排水する
ことなどを改善を求めて
いた。しかし、同局は北部
排水門付近にポンプ十基
を設置するとの当初案を
あらためて示したため、
漁協側は「養殖アサリな
どへの被害が懸念され
る。われわれも生活がか
かっている」などと主張
し、計画の見直しを強く
求めた。



へい死したアサリが散乱する養殖場
二今月9日、北高小長井町小川原浦名地先

アサリ 大暴死 被害額300万円超

高水温、酸欠など影響か

小長井

【諫早】今月初旬に北発生した養殖アサリの大口、被害額が三千万円を
高小長井町の一部沿岸で、量死で、同町漁協は十七超す見通しを明らかにし
た。

被害は養殖十八業者ほ
どで、このうち同日まで
に十二業者が被害状況を
報告した。へい死量は合
計約百ト、被害額は約二
千八百万円。未報告分を
含めると三千万円を超え
る見込みで、同漁協は取
りまとめを急いでいる。

大量死の発生は、同町
小川原浦名と并崎名地先
の二カ所。同町の養殖場
全域の約五分の一に相当
する。へい死率は高い所
で六割弱、低い所で二
割程度。
同町では昨年八月、赤
潮などが原因で養殖場一
帯のアサリが大量死し、
被害額は約二億六千万円
に上った。県によると、
今回の被害と赤潮の関連
は不明で、高水温や酸欠
など複合的要因の可能性
が高いという。

諫早湾干拓とタイラギ不漁

因果関係特定できず

九州農政局

農水省九州農政局は10日、諫早湾干拓事業と高級二枚貝タイラギ不漁の因果関係を調べる諫早湾漁場調査委員会(委員長、秦章男・元長崎県水産部長、13人)を、同県諫早市内のホテルで開き、「干拓と不漁との因果関係は、疑わしいが特定できない」とする調査報告書をまとめた。約9年がかりの調査で原因究明に至らなかったことについて、委員長は「原因をつきつめるデー

タが不十分だった」と説明。タイラギ漁業者からは「納得できない」と不満の声があがった。同委員会は、諫早湾干拓工事が本格化した91年ごろから、潮受け堤防のすぐ外側の長崎県小長井町沖で、タイラギが大量に死滅する現象が続いたため、干拓との因果関係を調べる目的で93年、九州農政局が設置した。報告書では、タイラギの漁獲量はもとより年々動が大きいとしながらも、93年以降、9季連続で休漁を余儀なくされている同町沖の現象については、「これまでとは性質を異にする」と指摘。湾内の潮流の分析、水質調査の結果などから原因を考察した。その結果、海水に溶けている酸素量が減っている貧酸素水の現象が見られたり、海底の泥の粒が細かくなったりして、タイラギが成育しにくくなった可能性があるが、現在の観測機器のレベルや調査体制では原因と断定できるデータが集められなかったとした。

委員会のものが約5年間かかれなかったことについては、委員長は「湾閉め切り後からノリ不作まで政治的、社会的な動きが大きくなり、原案を詰める国が対応できなくなった」と説明した。新宮隆喜・小長井町漁協組合長は「この間、何の調査ができたのか。怒りを通り過ぎてあきらめの気持ちだ。組合員は納得しないだろう」と話した。

と近く話し合いの場を設ける方針。同事業の水門開放調査については「(3月末に終了する)閉門調査をスムーズに開門調査につなげられるよう準備を進めたい」と述べていた。

型トラックを阻止し、同局職員とのならみ合いが終日続いた。同工区の調整池に流れ込む排水路の水門の地盤工事は午前9時ごろから始まった。工事関係者によると、漁業者が盛り込む陸上の入り口を避け、諫早湾の潮受け堤防北側から作業員10人ほどが入ったという。

農水省事務次官「引き続き説明」
国営諫早湾干拓事業(長崎県)の工事を一部再開したことに有明海沿岸の漁業者が抗議を続けている問題で、農水省の渡辺好明事務次官は10日の定例会見で「漁業者についていねいに説明してきたが残念だ。今回の工事は有明海の漁業に悪い影響を与えないことを説明していく」として、漁業者の理解を得る努力を続ける考えを示した。

抗議の中で 工事を継続
九州農政局は10日、約11カ月ぶりに再開した国営諫早湾干拓事業(長崎県)の工事を前日に続き同県高来町の小江工区で進めた。同工区の入河口では、反対する有明海沿岸の漁業者ら約50人が工事現場に入ろうとする大

第一段階として2カ月程度の開放調査を実施する方針だが、最終的に第三者委員会が求めた数年間の開放調査を実施するかどうかは「短期調査のなかで予期せぬことが出てくるかもしれない」として明言を避けた。

有明海のクルマエビ

5年前の6分の1に

有明海のクルマエビの不漁が深刻だ。福岡、佐賀、熊本、長崎の沿岸4県の01年の漁獲量は計56トと、5年前の約6分の1に激減した。赤潮や長崎県・諫早湾干拓事業の影響が指摘され、諫早湾口に近い佐賀県太良町の大浦漁協は00年、01年と事実上の休漁状態に追い込まれた。今月後半から本格化する今季の漁を前に、漁民たちの不安は募る。4県は国と共同で原因調査を進めている。

01年の漁獲量

佐賀・大浦漁協 2年続け休漁状態

農水省の統計では、4県の漁獲量(有明海分、養殖を除く)は96年に計321トあり、全国の15%弱を占めた。その後、

97年234ト、98年182ト、99年119ト、00年78ト、01年56トと年を追うごとに急速に落ち込んでいる。佐賀県有明水産振興センターによると、00年8月中旬に毒性を持つプランクトンの赤潮が有明海で蔓延した直後から、急にとれなくなった。大浦漁協の竹島好道組会長は「諫早湾干拓事業の潮受け堤防で潮流が変化し、海底に泥がたまるため、砂地を好むクルマエビがいなくなったのでは」とみる。「好漁場だった大浦町沖は泥が積もって海底がどこか分らない状態」といい、今季の漁も危ぶむ。



漁場調査委員会の最終会合終了後、記者会見する
秦章男委員長(左)と九州農政局職員ら
|| 諫早市宇都町、ホテルグランドパレス諫早

漁不ギラタイ

諫早の影響不明

九州農政局 調査委が報告口書

【諫早】国営諫早湾干拓事業とタイラギ(二枚貝)不漁の因果関係を調べる九州農政局の諫早湾漁場調査委員会(秦章男委員長)は10日、諫早市内で最終会合を開き、調査で得られた変化の範囲では干拓工事の影響は明らかでないことを明らかにした。

【社会面に関連記事】

特定に至らなかった玉虫色の結末に反発を強めている。

調査報告書は▽低酸素水の発生▽海底の泥が粘土状になる細粒化▽などが不漁の要因となった可能性を指摘したが、低酸素水を確認した範囲が一部にとどまるなど「核心となる部分を調査結果で明らかにできなかった」と

調査結果をまとめた。潮止め工事で湾を閉め切った九七年四月以降は専門部会の審議だけなどを求めた。

委員会は約五年間開

いた。

調査手法の開発や湾内

漁業の総合的な振興対策

などを求めた。

した。干拓事業の影

諫早湾では、潮受け堤防工事の本格化と同時期にタイラギが激減。報告書は「干拓事業が本格化し、諫早湾の海況に影響すると考えられる諸作業が増加した」と指摘。「操業できないまでに資源水準が落ち込んだのはこれまでとは異質の現象ではないかと考えられる」としたが、干拓事業の影響には踏み込まなかった。

一方で来年は1千万匹規模の稚エビを放流し、漁獲の底上げを図る方針だ。



大量のアサリの死がい広がる養殖場 10日、長崎県小長井町沖

諫早湾

養殖アサリ大量死 赤潮原因? 全滅の漁場も

諫早湾に面した長崎県千拓地寄りの漁場。地元はさらに膨らむと表情。小長井町と高来町で、養の小長井町漁協によるアサリが大量死している。約百の漁場全体で三、四割の被害が出ておる。同県は九月上旬から発生している赤潮が主因と分析している。赤潮は植物性プランクトンの大量発生によるもの。二日に「来春水揚げ予定の稚貝も死んでおり、被害総額日も同町沖合に滞留して」と話している。

同県は九月下旬から発生している赤潮が主因と分析している。赤潮は植物性プランクトンの大量発生によるもの。二日に「来春水揚げ予定の稚貝も死んでおり、被害総額日も同町沖合に滞留して」と話している。

有明海

5年ぶりに漁再開の荒尾市 9割「殻だけ」

タイラギ、今年も大量死



調査と、タイラギを調べる熊本県水産研究センター員

不漁のため休漁が続いていた有明海名産の一枚貝・タイラギ漁が五年ぶりに今月一日から熊本県荒尾市沖で再開したが、今季も大量の死貝が確認されていることが分かった。

同市沖はタイラギの主要な漁場だが、今月一日の解禁を待ちわびて漁を始めた漁業者たちは「今年もためか」と危機感を募らせている。

タイラギの大量死は、タイラギの生息調査を統

計している熊本県水産研究センターなどが二十日、漁場を調べて確認した。水深約五メートルの海底で採ったタイラギ百個のうち、九十個が殻だけ。生きていた十個のうち三個もかなり弱っており、残りも中身がやせていた。

一九九九年秋にタイラギ不漁が始まって以降、同センターは漁業者の協力を得て、大量死の原因や生息分布状況を調査してきたが、いまだ原因は分かっていない。昨年川幸一さんなどは、休漁もやむを得ない。今年水産業者協議会の竹島好道会長(佐賀県太良町)は、漁解禁を前に「もう一度生息調査をして」と話している。

同センターは十二月は十二月十日から三年ぶりに漁を再開する。今月上旬の生息調査で、複数の海域で確認されているが、両県のタイラギ漁業者でつくる有明海漁業協会のメンバーは、今年水産業者協議会の竹島好道会長(佐賀県太良町)は、漁解禁を前に「もう一度生息調査をして」と話している。

一方、福岡、佐賀県で

福岡、佐賀沖の有明海

3年ぶりタイラギ漁



3年ぶりに再開された漁で採れた二枚貝「タイラギ」
＝10日午前10時、佐賀県沖の有明海

福岡、佐賀両県沖の有明海で10日、漁獲量が激減している二枚貝「タイラギ」の潜水漁が3年ぶりに再開された。環境異変が指摘される有明海で

のタイラギ漁獲量は一九九九年からほぼゼロ。二三年間は漁の申請自体なかった。タイラギは長さ三十センチ程度、海底に突き刺すように立つのが特徴。貝柱などを刺し身や焼いて食べる。午前九時、沖合の漁場にひしめき合う約八十隻の漁船から、ヘルメット型の潜水器具を付けた潜水士が一斉に水深約一五メートルの海に入った。貝の入った網が次々と船で引き上げられると、船場の別々の漁場でタイラギの成育が確認され、漁業者団体は漁を申請。両県合わせて約百三十隻が許可を受けた。操業許可期間は来年三月三十一日まで。



船中では、潜水士が取ったタイラギの殻をむく作業が続いた。10日午前9時30分、佐賀県沖の有明海で

タイラギ漁、不安な再開

貝柱小さく 量も少なめ

佐賀、福岡両県沖の有明海で10日、二枚貝「タイラギ」の漁が始まった。9年度以来の水揚げだったが、漁業者の期待に反して貝柱は小さく、量も少なめ。3年前から続く成貝の大量死も原因不明のまま。漁業者は今後の生育に期待する一方で、「いつまで取れるかわるか」と不安な顔も見せた。漁期は年度内だが、成貝がなくなり次第、終わる。

有明海中央部の漁場には約30隻の漁船が出て、午前9時に各船から潜水士が一斉に海へ飛び込んだ。佐賀県太良町の太良孝行さん(57)の船では最

初の30分間で、タイラギ約400個が入った袋を回収し上げた。貝殻は15センチほど、大きいが、身は小さい。捨てたものは太るだろうが、「……」と不安だ。佐賀県有明水産振興センターによると、00年以降、6・8月に成貝が大量死。海中の酸素濃度が下がり、餌不足が原因と指摘されるが、原因は不明だ。

赤潮 養殖アサリ全滅

佐賀・太良町沖 被害額は数億円か

2004年(平成16年)8月15日

佐賀県太良町大浦沖の
有明海で赤潮が発生し、
同町の海岸にある養殖場
(約三万三千平方メートル)
のアサリが、ほぼ全滅状態
になっていることが十四
日、地元漁業者の話で
分かった。

赤潮は同町や同県鹿島
市沖で三日に初観測。同
県有明水産振興センター
(芦刈町)の調べで、毒
性が強い「シヤトネラ」
と呼ばれるプランクトン
などであることが判明。
猛暑で水温が例年より二

三度上昇しており、十
一日には、同町沖で養殖
カキやグチなどが死ぬ被
害も発生、赤潮による被
害が拡大している。
アサリの養殖場は太良
町の牟田尻海岸にあり、
大浦漁協の組合員約百人

が管理。今年は来年二月
からの漁に備えて禁漁に
していたという。十四日
午後の干潮時に大鋸義穂
さん(みくら)ら組合員が腐敗
臭に気づき、現場を調べ
たところ、少なくとも幅
三百メートル、長さ一キロ以上に

わたってアサリの死がい
が転がっていたという。
大鋸さん一人だけで被
害額は千五百万円として
おり、全体の被害額は、数
億円に上るとみられる。
大鋸さんは「長年、養殖を
やっているが、こんなに
ひどい被害は初めて」と
頭を抱えている。現場の
海岸は長崎県小長井町と
の県境にあり、地元漁民
によると、長崎県沖の有
明海でも赤潮による被害
が出ているという。

養殖のアサリ

赤潮で大量死

佐賀・長崎の有明海

佐賀、長崎県境沖の有
明海で赤潮が発生し、ア
サリ養殖場で貝が大量死
するなどの被害が出てい
る。今のところ、被害が

確認されたのは佐賀県太
良町沖などだけだが、被
害が拡大する恐れもある
として、関係者は危機感
を募らせている。

太良町の養殖場では、
口を開けて死んだアサリ
の殻が、びっしりと干潟
の表面を埋めていた。87

年から養殖を続ける平方
宣清さん(51)は「14日に
腐臭がしたので来てみた
ら、アサリが身をむき出
して死んでいた。赤潮で
半分ぐらい死んだことは
あるが、全滅は初めて
だ」と話した。被害額は
1千万円以上という。

諫早湾タイラギ 13年連続休漁へ

諫早湾で操業する長崎県内の四漁協が九、十の両日、タイラギの成育調査を湾内四十地点で行った。体長一〇センチ以下の稚貝が三地点で計十個しか見つからず、同湾のタイラギ漁業者でつくる新泉水海潜水器組合は「質量ともに不十分」として、今月末にも総会を開き、一九九三年以降十三年連続の休漁を決める。

四漁協は十月にも砂が多く、タイラギが成育しやすい漁場十二地点を調査。五地点で六十四個が見つかり、いずれも稚貝だった。

同湾のタイラギ漁は、国営諫早湾干拓事業の工事が本格化した九二年ごろから不振が続いている。潜水器組合の松永秀則組合長(五五)は「海底環境が悪すぎる。国の有明海再生策で改善することは思えない」と話している。



2003年に解禁されたタイラギ。同年12月10日、佐賀県大良町の有明海

タイラギ漁3季ぶり再開へ

福岡・佐賀 有明海 生息数、回復確認 漁業者「漁獲量に不安」

福岡、佐賀両県の潜水業者は二十四日、佐賀県有明海漁連(佐賀市)で協議会を開き、生息数の減少で禁止していた有明海のタイラギ漁を三季ぶりに再開することを決めた。生息数の回復が確認されたため、十二月月上旬に両県に許可申請を提出する。漁期は来月十五日から来年三月三十一日までとしている。

佐賀県有明水産振興センターが十三日に調査した有明海のタイラギ生息状況によると、二〇〇四年度には生息が確

認されなかった沿岸五漁場のうち、三漁場でタイラギが確認された。しかし推定貝柱重量は約八割と〇三年度の約八分の一にとまり、関係者は「漁は数日で終わる可能性もある」としている。

「福岡・佐賀両県有明海潜水器漁業者協議会」の副会長で、大浦漁協(佐賀県太良町)の竹島好道組合長は「漁獲量の確認がなく手放しては喜べない。エイに食われたり、立ち枯れ死したりする心配があり、生息数が少ない」と、漁解禁に踏み切る理由を語った。

同県太良町大浦の漁業大賀幸弘さん(五〇)は「十七歳から漁を続けてきただけに三季ぶりに海に入れるのは楽しみだが、潜水器員を新たにそろえると出費も少なくない」と不安をのぞかせた。

タイラギ13季連続休漁

諫早湾 調査で成貝見つからず

諫早湾の二枚貝・タイラギ減る原因究明のため、諫早湾で試験的にタイラギについて、湾沿岸のタイラギ早湾干拓事業の中・長期開イラギ漁を行ったところ、海潜水器組合(松永秀則組合長、約40人)は22日、諫早市小長井町で総会を開き、13季連続で休漁することを決めた。

同組合によると、11月下旬に湾内12か所で生息調査を行ったが、漁獲の対象となる15センチ以上の成貝は一つも見つからなかった。

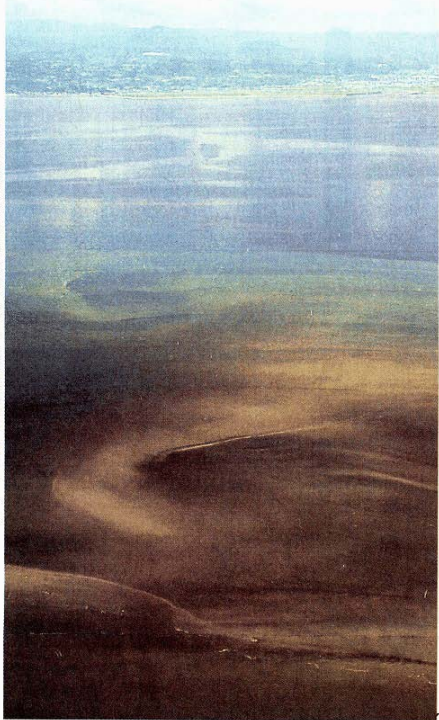
有明海で漁を行う福岡、佐賀両県の漁業者も2季連続の休漁を決めている。

また、松永組合長らが11月下旬、大村市の漁協と協

力して大村湾で試験的にタイラギ漁を行ったところ、海潜水器組合(松永秀則組合長、約40人)は22日、諫早市小長井町で総会を開き、13季連続で休漁することを決めた。

臨時総会で再度協議する。

松永組合長は「タイラギが育たない原因にはいろんな説があるが、諫早湾干拓工事の影響が大いと感じている。我々は海を元の状態に戻しても、権利があり、行政にも責任があると主張したい」と話した。



有明海全域で広がっている赤潮。26日、佐賀県鹿島市沖(本社へりから)

有明海の赤潮拡大

有明海で月中旬から 県の太良町沖から長崎県 見ることができた。 広域発生している「平成」の諫早湾にかけて広がった。佐賀県水産課によると、最大級の赤潮はさらに、上空からはしょうゆと、猛暑で水温が上昇するにつれて、佐賀 色に濁った様状の海域を、るなどの影響で植物性フ

ランクトン・ジャットネラが大量に発生。佐賀 県白石町沖では二十四日 調査で細菌数が一センチ 中一万三千個と、アサリ が大量死した。〇〇四年 以来の多さだった。

有明海沿岸では死んだ コノシロやエビが大量に 漂流・漂着しており、同 県は、十七日も調査船を 出し、赤潮の状態に合わ せ魚介類の被害状況も確 認する。

アサリ大量死 長崎県も確認

有明海の赤潮被害によ り、長崎県諫早市沖で養 殖アサリが大量死するな どの被害が出ている。同 県は、二十六日に諫早湾の 十二カ所で調査を実施、 同市小長井町の諫早湾十 拓事業の潮受け堤防近く の養殖場で、アサリがほ ぼ全滅状態となっている のを確認した。コノシロ などの種類も数十の被害 害が出ているという。

同県は被害実態と赤潮 の調査を進めるとともに、漁協と協議しながら 対策に乗り出している。



大量死したアサリ貝が無数に散らばった小長井町の海岸

諫早湾の赤潮

アサリの被害深刻

打つ手なく苦悩の漁業者

有明海が広域で八月 下旬、平成赤潮(県産水産試験場)の 赤潮が発生し、諫早湾の 一部地域で養殖アサリが 命を失うなど被害が 広がっている。有明海で 毎年のように報告される 赤潮被害、漁業者の心理 的、経済的打撃は大きい が、発生を食い止め、被 害を軽減する有効手段 はなく、県や漁協に対 策に頭を悩ませている。

(長崎県・前田英典、 藤吉島・阿部留北)

諫早湾で養殖 するアサリは、今秋は 例年より早く、八月 下旬から赤潮が発生し、 被害が拡大している。 漁業者は、アサリが 大量死するにつれて、 養殖場の収入が激減 している。また、赤潮 によるアサリの品質 低下も懸念されている。

諫干の影響指摘も根強く

八月の長崎県は、 赤潮が発生している。 漁業者は、赤潮によ り、アサリが大量死 している。また、赤 潮によるアサリの質 量低下も懸念されて いる。漁業者は、赤 潮による被害を軽減 するための対策を求 めている。

視点 07ながさき

有明海沿岸では死んだ コノシロやエビが大量に 漂流・漂着しており、同 県は、十七日も調査船を 出し、赤潮の状態に合わ せ魚介類の被害状況も確 認する。

有明海の赤潮被害によ り、長崎県諫早市沖で養 殖アサリが大量死するな どの被害が出ている。同 県は、二十六日に諫早湾の 十二カ所で調査を実施、 同市小長井町の諫早湾十 拓事業の潮受け堤防近く の養殖場で、アサリがほ ぼ全滅状態となっている のを確認した。コノシロ などの種類も数十の被害 害が出ているという。

を閉め切った一九七 七年間、四十年で推移 していたが、九八年以 降は四十一年と増加し ている。因果関係は「 水産資源保護法」の 施行が原因と見られる。 国の公害 等調査委員会の五年の 調査で、科学的根拠の 不足から、赤潮の発生 する可能性が高いと判 定された。しかし、今 も 八月の長崎県は、 赤潮が発生している。 漁業者は、赤潮によ り、アサリが大量死 している。また、赤 潮によるアサリの質 量低下も懸念されて いる。漁業者は、赤 潮による被害を軽減 するための対策を求 めている。

諫早湾窒息

赤潮直撃アサリ死滅

諫早湾北岸の長崎県諫早市小長井町で、養殖アサリが死滅する被害が起きている。県総合水産試験場によると、有明海で8月上旬から発生した赤潮の影響で海水の酸素濃度が低下したためとみられる。被害を受けた海域は諫早湾干拓事業で建設された潮受け堤防に近い。「堤防で潮流が弱まり、赤潮の被害も大きくなった」との指摘もある。地元漁業者からは「天災ではなく人災だ」との声が上がっている。

(岡田玄)

堤防で潮流弱まる？ 地元漁師ら「人災だ」

小長井町の海岸線。口を開けたアサリが一面に広がり、腐敗臭が漂う。足を踏み入れると「サクサク」と貝殻が砕ける。厚さ10センチほどに積み重なっているところもある。地元漁業者は「腐敗臭が徐々に東に移動している。被害はもっと広がるだろう」と見る。沿岸に赤潮が広がったのは8月上旬。定置網のコノシロは全滅。被害が深刻だったのは沿岸一帯に広がる養殖アサリ。長崎県が8月26日に小長井町沿岸の12カ所を調査したところ、3カ所で全滅し、全体では4割が死んでいたという。

小長井町のアサリの水揚げ量は05年度で271万トン、水揚げ高は1億5000万円。長崎県産の大部分を占めている。小長井町漁協では、組合員98人のほぼ全員がアサリ養殖業者の話では、例年、夏



分を占めている。小長井町漁協では、組合員98人のほぼ全員がアサリ養殖業者の話では、例年、夏

分を占めている。小長井町漁協では、組合員98人のほぼ全員がアサリ養殖業者の話では、例年、夏

を手にかけており、漁協の全水揚げ高の6割以上を占める収入源だ。畑のように区画を分け、各漁業者が管理する先進的な養殖方法にも取り組んでいる。近くの漁師植木清治さん(51)は「補償もなく、どうやって生活していけばいいのか」と嘆く。

小長井町は、潮受け堤防の東側。堤防の内側にある調整池から、淡水を定期的に排出する北部排水門の目の前だ。地元漁業者の話では、例年、夏

場に淡水が排水された後に赤潮が発生し、アサリが死ぬことがあるが、これほどの被害は初めてという。同漁協理事の松永秀剛さん(54)は「この夏は水温が高く赤潮が発生しやすい状態だったのに排水を繰り返したため、被害が大きくなったのでは。しかも堤防が出来てからは潮流が弱くなり、汚れた水が消えてくれなくなっている」と語る。長崎大学環境科学部の姫野順一教授(環境経済学)は「調整池から排出される汚れた水が海のバランスを崩し、特に排水門近くのアサリ漁場に大きな影響を与えたのではないかと指摘する。一方、県は干拓事業との関連について、赤潮発生メカニズムが解明されておらず、直接の原因とは断定できないとしている。」

アサリ被害3億円

小長井町漁協 生活保障要望へ

諫早市小長井町の沿岸で養殖アサリが大量死している問題で、小長井町漁協(新宮隆喜組長、組合員98人)は4日、被害総額が約3億円とする集計結果をまとめた。今後、県や市に生活保障などを要望する。

同漁協幹部によると、これまでに養殖アサリの7割にあたる約120トンのアサリが死滅。被害額は過去最大規模という。被害を受けた海域も拡大。全滅が確認された海域は8月26日の県の調査より、東に1、2キロ広が

出る恐れがある。同漁協は4日、役員会を開き、対策を検討。組合員から要望の多い生活保障のほか、死んだアサリの撤去、漁場整備などを県や市に要望していくことを決めた。

朝日新聞 2007年(平成19年)10月31日(33) 社会

諫早のカキ9割死滅

養殖アサリの大量死が8月に発生した長崎県の諫早湾で、11月1日からの販売を控えた養殖カキの約9割が死滅していることが県と小長井町漁協の調査でわかった。夏の猛暑で海水温が下がった時期が遅れたのが原因とみられる。冬の風物詩のカキ焼き小屋が沿岸に並ぶまであとわずか。相次ぐ凶悪な、漁師たちは困惑している。



「これも死んでいる……」。引き揚げて、殻だけのカキが目立つ。11月30日午前11時頃、長崎県諫早市沖の有明海で、水野隆則撮影

アサリに続き…養殖業に打撃 猛暑、水温に影響?

30日、諫早湾を地元の漁師と一緒にボートで10分ほど進んだ。竹で編んだ養殖かだががいくつも浮いている。長さ5・5メートルのロープを引き揚げてもらった。泥にまみれた殻の固まりが姿を現した。どれも半開きで腐敗臭がする。「わずかに生きているカキも小さい。出荷できるかどうか。漁師は肩を落とした。県と同漁協によると、死滅したカキが次々に見つかるといったのは9月中旬ごろ。今月18日、湾内のいかだ100基のうち20基を調べたところ、カキの生存率は1割前後だった。5%のいかたもあった。

県総合水産試験場によると、例年の生存率は8割前後。夏に高温が続くと、海水温の低下が遅れたのが原因ではないかと推測する。11月に完成



ないかと指摘する。干拓事業が着工してから漁獲量は低迷し、組合員らは98年から新たな振興策としてカキ養殖に取り組んできた。昨年度の水揚げは約173、約7千円。アサリと並ぶ収入の柱だ。漁協幹部は「お騒がせ」を前に注文を聞いて、こんなことは初めて。組合員の生活が心配だと顔を曇らせた。沿岸でカキ焼き小屋を毎年開き小長井町は「例年通り小長井産のカキを出せるかどうか。よその産地のカキを使わざるを得ない」と話した。(奥型型子、加藤勝利)

諫早湾と隣り合う佐賀県太良町。県と県有明海漁協大浦支所が死日、養殖いかだ10基を調べたところ、7割程度が死滅していた。同漁協の下田貴利支所長は「11年でも半分くらいは死滅する。今年は稚魚が少なかったけど、昨年度は7割だった水揚げは50、80」とみる。一方、今月からカキ焼き小屋の営業を始めた男性は不安そうだった。「うちのいかたはほぼ例年並み。有明海のカキ全体が不振のイメージを持たれないか、心配だ」

タイラギ漁獲 過去最低

今季有明海 佐賀2キロ、福岡も低迷

有明海特産の二枚貝タイラギの今季水揚げ高が、福岡、佐賀両県とも過去最低だったことが三十一日、分かった。漁期は昨年十二月二十日から今年三月末だったが、生息数が極めて少なく、解禁直後の数日で実質的に漁は終わっていた。佐賀県有明海漁協によ

ると、佐賀側は解禁日に漁船九隻で出漁し、貝柱の水揚げ高は一・二九キ、二日目は一隻が〇・七キ採っただけ。途中で引き返して漁獲が上がっていない漁業者も多かったという。

福岡県有明海漁連は、水揚げ高が確定していないが「五キ以上は採れているが、十キに達するかどうか。過去最低は間違いない」としている。

佐賀では最盛期の昭和五十年代には千ト超の水揚げがあったが、年々減少し、潜水漁でこれまでの最低は二〇〇年度の七キだった。生息数が少なかった今季、両県の漁場は福岡県大牟田市沖の一部に限られていた。佐賀県有明海漁協は「立ち枯れ死やナルトビエイの被害を受けたタイラギが多かった。来季も手探り状態が続くだろう」としている。

「諫干被害」提訴へ

漁業不振「工事の影響」

原告団集会 漁師ら訴え

国営諫早湾干拓事業により漁業への被害を受けたとして、5月上旬にも国に損害賠償などを求める新たな訴訟を起こす漁師や弁護士ら35人が11日、佐賀県太良町で原告団結成集会を開いた。原告には、諫早湾周辺で暮らす長崎、佐賀両県の計約60人が加わる見込みという。湾周辺の漁師が連携して立ち上がった。



「漁ができる海に戻してほしい」と訴える原告団長で漁師の松永秀則さん(右)と馬奈木昭雄・弁護団長＝佐賀県太良町

集会に参加した原告団長の漁師、松永秀則さん(54)は「諫早湾の早市小長井町は、諫早湾の漁業不振は干拓工事による影響」と確信しているという。工事前、国から「工事後も漁業はできる」と説明されていた。だが、干拓工事が終わった後も有明海の水質は回復せず、昔のように漁業ができなくなった。同町の小長井町漁協を含む湾内4漁協の漁師らは漁業で生活できなくなった。その結果、干拓工事

を請け負う人も多く、国にだまされたという気持ちが強いの。松永さんは「これまで雇用という国の『あめ玉』に縛られ、提訴できない人もいたが、工事が終わった今、みんなで訴えることができる」と話した。工事差し止め訴訟など同事業をめぐる一連の訴訟を支援してきた馬奈木昭雄・弁護団長(66)は「干拓事業はもう完成してしまった。漁業被害を明らかにし、抜本的な解決をめざす」と力を込めた。原告団は、潮受け堤防の排水門を開門すれば海の水質は再生し、漁ができるようになる」と主張する。諫早湾では、干拓工事が始まった直後の93年から高級二枚貝のタイラギが死に絶えるようになり、休漁が続く。養殖アサリも激減した。一方、潮受け堤防に仕切りられ淡水化された調整池は農業用水に使われる予定だ。だが、アオコが大量発生して環境が悪化し、水質は県が定めた基準に達していない。



砂地のアサリ 海中へ避難

ネットのかごにアサリを入れて、いかだからつり下げる準備をする漁業者ら＝諫早市小長井町沖

諫早の漁協、つり下げ実験

諫早湾沿岸で昨年夏、養殖アサリが大量死したのを受け、諫早市の小長井町漁協(新宮隆喜組合長)は、砂地に生息するアサリを海中につり下げることによって死滅を防ぐ実験を始めた。赤潮の影響で酸素濃度が低くなりがちな海底からアサリを「避難」させて、大量死を避けるのを狙った全国でも珍しい試みだ。

26日早朝、養殖業者ら20人以上が約10隻の漁船に乗って地元港を出た。沖合約300メートルの泥濘じりの海底からアサリを捕獲し、10センチに仕分けし、2重にしたネットのかごに入れた。沖合1キロに浮かぶかき舟の養殖いかだに次々とつり下げていった。同漁協は、29日まで4基のいかだに約1200のかごをつり下げ、水深1メートルの海中で9月中旬ごろまで育てる。漁協と市が毎週、生存率や成長具合などを調査する。3年間にわた

海底は酸素薄 死滅の恐れ

つり下げる実験をする予定で、今年度分の事業費913万円のうち、県や市などが880万円を補助する。

アサリは砂地で養殖するのが一般的だが、昨夏は壊滅的な被害が出た。市農林水産部によると、赤潮の原因となる植物プランクトンが酸素を大量に消費しながら死んで、海底に沈んでもバクテリアによる分解でさらに酸素を消費する。海水の循環が少なく、酸素濃度が著しく低下したのが原因とみている。

対策に頭を悩ませていた漁協が県に相談したところ、県が実験を提案した。県総合水産試験場が06年冬、諫早湾でアサリを海中につり下げる実験をしたところ、砂地のアサリより育ち、実入りもよかったためだ。

漁協は昨夏のアサリ被害で、億円以上の被害が出たと算出した。養殖業者の一人は「とにかく生活が苦しい。わりにもやがる思いで実験を睡けた」と話していた。

諫早湾や有明海で赤潮

諫早湾内や湾外側の佐賀県沖の有明海などで赤潮が7月26日から発生しており、県は周辺漁協に警戒を呼びかけるとともに、漁業被害について調査を進めている。

県、警戒呼びかけ

県総合水産試験場(長崎市)などによると、1日までの調査で確認された主な植物プランクトンの細胞は4種。このうち魚類に対して毒性が強い「シャトネラ・アンティーカ」など2種がまとまって見つかったのは今年初めて。この2種は昨年夏にも大量発生しており、アサリの大量死などの被害が出た。20～32.5度と水温が上がる時期に大発生する傾向がある。

有明海沿岸 魚介類大量死 調査や原因究明要望

訴訟支援者ら

諫早市や佐賀県太良町の有明海沿岸でハゼやボラなど大量の魚介類が死んでいるのが見つかつた13日、有明海訴訟の支援者らは被害状況の調査に現地へ向かつた。1帯では7月下旬から赤潮が発生しているが、大量死の原因や被害の範囲は分からないまま。支援者らは諫早湾干拓事業が何らかの影響を及ぼした可能性もあるとみて、九州農政局(熊本市)や長崎県、諫早市に対し、漁業被害の現地調査と原因究明を申し入れた。(加藤勝利)



正午前、JR小長井駅近くの海岸には腐敗臭が漂っていた。辺り一面に広がるハゼの死骸は体長数センチから十数センチほど。強い日差しを浴びて干からびている。
ハゼやワタリガニなどの死骸を手にする松永さん(諫早市小長井町)

支援者による調査に同行した小長井町漁協理事の松永秀則さん(64)は、死んだハゼやワタリガニやカレイ、エビなどを手に取つた。「干拓事業が原因に間違いない」と険しい表情で語る。

この日午前5時半ごろ、松永さんが出漁の準備で近くの港に着くと、魚があえずよくうに海面に浮いているのを見つけた。その後に入手した情報では、同市を中心とした有明海西岸で数センチから十数センチにわたつてハゼなどの死骸が打ち上がったといふ。

松永さんや支援者によると、「ギロチン」と呼ばれる293枚の鋼板で諫早湾を閉め切つた97年4月以降、沿岸では魚介類の大量死が数度にわたつて起きた。昨年夏も、養殖アサリの大量

死が見つかつた数日前に、やはり魚が死んでいたといふ。

湾内では先月26日から赤潮が発生している。原因である植物プランクトンは海中の酸素を消費し、死んだ後もバクテリアが分解するため、さらに海底の酸素が奪われる。

「湾を閉め切つた潮受け堤防で海水の循環が妨げられた現状では、酸素濃度が著しく低下した状態が続く」と松永さん。「昨年のようにアサリが大量に死んでいないか心配だ。ハゼなどの魚介類と同様、漁師の生活の糧だから」とつぶやいた。

「よみがえれ!有明海訴訟を支援する全国の会」の岩井三樹事務局長も、「こんな不可解な現象を解明するには、堤防の排水門を開けて調べるしかない」と語つた。

諫早湾に「青潮」 貧酸素原因

長崎県の諫早湾で15日、海面が青白く変色する「青潮」とみられる現象が起きた。海中の酸素欠乏が原因とされる。同湾沿岸などでは12、13日に魚介類の大量死が見つかつており、専門家は「貧酸素が一因だった可能性を示している」と指摘している。

写真撮影した諫早市の坂田輝行さん(60)によると、15日午後3時ごろ、国営諫早湾干拓事業

で造られた潮受け堤防外側の海面が、南北方向に約7キロ、東西方向に数百メートルにわたり青白くなっていた(写真)。

独立行政法人・水産総合研究センター中央水産研究所の元所員で、海洋化学が専門の佐々木克之さんによると、海底近くの水が酸欠状態になると硫化水素が発生する。硫化水素が大気に触れて酸化され、硫黄の粒子が生じ、光を反射することなどが



ら、海が青白く見えると考えられている。

佐々木さんによると、海中酸素濃度が30%を下回ると魚類の生息は困難という。農林水産省

によると、潮受け堤防の北部排水門近くでは、13日午前5時~15日午後3時の海中酸素濃度は3%以下、坂田さんが撮影した時間帯は1.8%だった。

タイラギ漁 今年も休漁

諫早湾、16年連続

長崎県諫早市の小長井町漁協など諫早湾内の三漁協は二十三日、同湾で

大型の二枚貝タイラギの成育状況を調査したが、漁の対象となる成員（一五センチ以上）は確認できず、十六年連続で休漁となる見通しとなった。

一方、二年ぶりに稚貝を確認し、来年以降の漁再開に望みをつないだ。

湾口近くの漁場四十地点で調査した。各地点で約三分間潜水し、タイラギの生息数を調べた。昨年は成員も稚貝も見つか

七地点でふ化後一年以内とみられる三十九センチの稚貝を確認した。稚貝の数は二一三十七個とばらつきがあったものの、二年前の調査に比べて九地点増えたという。

タイラギが成貝に育つには二、三年を要し、今年の漁再開は困難。小長井町漁協は、二年ぶりの稚貝の確認について「一過性なのか、長期的に成育できる環境に変わったのか、今後の状況を見たい」と期待している。

一方、昨年は残暑による海水温上昇で激減したカキは十一月一日にも出荷が始まる見通し。過去最高の数量も見込まれるほど成育順調という。

排水門、大雨開門に抗議

県に小長井町漁協「事前協議の徹底を」

大雨で農地が浸水したとして県が国営諫早湾干拓事業・潮受け堤防の排水門を開門したことを巡り、諫早市の小長井町漁協（新宮隆喜組合長）の理事ら16人が6日、県庁を訪れ、「排水による漁業被害は甚大」などと抗議し、排水前の事前協議を徹底し、今後、対策づく



「今後の対策を示すべき」と抗議する漁業者（県庁で）

りを進めるよう求めた。県農林部によると、3日、調整池に面した諫早市森山町の水田など約60平方メートルを

新宮組合長は「非常時に門を開けるのは仕方ないが、事前の排水対策ができておらず、（漁協に連絡をせず）開門するのは問題」と述べ、「防災対策や農業者のためなら漁民が被害を受けてもいいのか」と強く批判。漁業者らは「アサリの稚貝が死ぬと、漁場回復に2〜3年はかかる。今後の対策を示すべき」と声を荒らげた。

県側は中村法道副知事、農林部幹部ら約10人が対応。中村副知事は「開門を避けるために水位調整に努力したが、予想を超える雨

量で、防災のためにやむを得なかった」と説明し、理解を求めた。

諫早湾でアサリ大量死

有明海沿岸で赤潮発生に伴う漁業被害が相次ぐなか、諫早市沿岸のアサリ養殖場で、アサリが大量死していることが5日、わかった。



同市の小長井町漁協などが調査した。同漁協理事の松永秀則さん(55)の養殖場約5000平方メートルは、貝

が開くのが約9割が死滅。同漁協によると、国営諫早湾干拓事業・潮受け堤防排水門から溢さるにつれ、被害の割合は低いという。

松永さんは「排水門からの排水が原因では。排水門を常時開放し、富栄養化した淡水を急激に流さないようにしなければ、被害は抑えられない」と訴えた。

県総合水産試験場によると、アサリの大量死の原因のひとつとして、大雨により海水の塩分が低い状態が長く続いたことも考えられるという。

ら、毒性の強いプランクトン「シャトネラ」による赤潮の発生が拡大している。

タイラギ漁 明暗の解禁

長崎

17年連続休漁

高級二枚貝タイラギの漁が、福岡・佐賀両県の有明海沿岸で解禁された。初日の13日は、佐賀県有明海漁協大浦支所の水揚げが前年解禁日の8倍となるなど、近年にない大漁の滑り出しとなった。国営諫早湾干拓事業(諫早市)を境に漁獲が激減し、断続的に休漁を繰り返してきた。だが、今季は順調な生育が確認され、福岡・佐賀両県の漁獲量は、同干拓事業の堤防が閉め切られた1997年度並みの水準に回復すると見込む。一方、長崎県は今年も生育状況が回復しておらず、17年連続で休漁を決めている。

13日早朝、佐賀県太良町沖の3〜10㎡の漁場には、同町や福岡県柳川市などから漁船50隻が出た。漁師たちが海に潜って海底に仕掛けた網を揚げ、船上で女性たちが殻から

福岡・佐賀

大漁スタート

身を外すと、甲板はすぐに貝殻であふれた。

所属漁船20隻が出漁した大浦支所では、この日、貝柱の水揚げが421kgと、前年の50kgをはるかに超えた。



福岡・佐賀両県は10〜11月に漁場を調査し、前年の50倍近い成貝約4800kg(貝柱換算300kg)が生育していると推定。両県の漁業者らでつくる合同の漁業調整委員会が11月26日、解禁日を前年より10日前倒しすると決定した。漁期は来年4月末までで、佐賀県水産課は実際の漁獲高を、生息数の約3分の1

にあたる100kg程度と見込

む。佐賀県有明海漁協では漁獲量が減り始めた90年代から、海底を耕して貝が育ちやすい環境の回復を進めており、同漁協の担当者は「海を守るうとする地道な取り組みが実を結び始めたのではないか」と指摘する。

一方、長崎県では、小長井

とれたタイラギで足の踏み場もない漁船の甲板。佐賀県太良町沖の有明海、波多野陽撮影

漁協(諫早市)など諫早湾内3漁協が10月に湾内の40地点で潜水調査をしたところ、16地点で2〜50個、計188個の成貝を確認した。成貝の確認は数年ぶりで、出荷基準となる体長15mm以上の貝も100個あまり見つかった。

ただ、長崎県資源管理課によると「この程度ではまだ操業できるレベルにはなく、来年以降の生育もまだ不明」とも操業できる状態にない」といい、休漁を決めている。タイラギは水深5〜20mの砂泥質の海底に生息する。有明海は全国有数の産地で、1960年代には年間の漁獲量が3万kgを超していた。

意見書と要望を提出

3月定例会では、議員発議として提出された意見書と要望を可決し、関係機関に提出しました。

諫早湾の漁場再生等に関する意見書

国営諫早湾干拓事業に伴う、諫早湾の残存海域の水産振興については、これまで本市においても継続的に特別対策を実施し推進してきたところであります。

しかしながら、主要漁獲物であるアサリをはじめ、漁獲高は年々減少傾向にあり、漁業経営は大変厳しい状況となっています。

そのような中、昨年8月上旬頃から発生した赤潮や貧酸素水塊の影響により、養殖アサリがほぼ全滅し、更には、諫早湾の新たな振興策として取り組んでいた養殖カキの九割が死滅するなど、多くの漁業者が深刻な被害を受けました。

本市は県と共に、緊急的に漁場への覆砂や種苗放流事業などへの支援を行いました。が、諫早湾の漁場はいまだ回復する状況にはなく、非常に厳しい事態が続いています。

よって、一日も早い漁場再生のためにも、国におかれましては、下記の事項について特段の措置を講じていただきますよう強く要望いたします。

記

- 1 諫早湾の漁場再生・水産業振興対策事業並びに調整池の排水対策及び水質保全のための生活排水対策事業に係る財政支援
- 2 赤潮等の原因究明及び対策
- 3 漁業共済制度の拡充

以上、地方自治法第99条の規定に基づき意見書を提出します。

平成20年3月26日

諫 早 市 議 会

(提出先 内閣総理大臣、総務大臣、財務大臣、農林水産大臣、衆議院議長、参議院議長)

市発注工事における市内業者の活用等に関する意見書

我が国の経済は、長期にわたり景気回復基調にあると言われているものの、建設投資の大幅な縮減により、建設業界は逼迫した経営状態が続いている。中でも公共事業依存度の高い地方建設業は、需給バランスが崩壊する中で、経営悪化に拍車をかける深刻な状況となっている。建設産業は関連業者も多岐にわたり、地域経済の活性化や雇用の確保に大きな役割を担っていることから、その衰退が地域経済に及ぼす影響は極めて大きい。

現状において、本市が発注する工事における市内業者の受注率は概ね90パーセントと聞いているが、ここ数年、市内の建設業者が倒産、廃業に追い込まれていることも事実である。

よって、市内建設業界の厳しい経営状況に鑑み、今後も本市発注工事において市内業者の優先活用を図ることはもとより、設計及び工事の下請けや資材・機材の調達において市内業者が更に活用されるような方策や最低制限価格の緩和など入札制度の改善を要望する。

平成20年3月26日

諫 早 市 議 会

(提出先 諫早市長)

